
髪と蛇

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

髪と蛇

【Nコード】

N9840E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

六千石の大旗本若松実吉。年頃になった彼が嫁を二人貰い彼女達と一緒に寝かしていると何とその髪の毛が。嫉妬は誰にでもありません。

第一章

髪と蛇

江戸も徳川家が入ってかなり経ち元禄の華やかな世になった。世間は太平どころか繁栄を謳歌し華やかな催しに満ちていた。その中で若松実吉はもういい歳になっていた。

「御主も嫁を貰ったらどうだ」

周りからは何かあればこう言われるようになっていた。彼は六千石の旗本の家跡取りで家柄も石高に關しても文句のないところだった。だがまだ嫁はなくしきりにこう言われていたのだ。

「そろそろな」

「持つのだ」

「持つのはいいが」

しかし彼はここでいつも難しい顔をするのだった。

「二人欲しいのじゃ」

「二人とな」

「左様、二人じゃ」

つまり正室と側室だ。彼の家位ならばこれは普通であると言えた。

「二人欲しいのじゃが。駄目かのう」

「よいのではないか、別に」

「そうじゃそうじゃ」

当時は少し家柄や金があれば女房を二人持つのも三人持つのも普通だった。誰も反対したりはしなかった。そういう時代だったのだ。

「しかし問題はその相手じゃな」

「一人だけでも見つけるのに骨が折れるが二人とな」

「気立てのいい娘がよい」

実吉が言うのはそれだけだった。

「それだけじゃ」

「では正室ではなく側室を二人持つてはどうか」

知人の一人がこう提案してきた。

「側室を二人か」

「うむ、それでどうじゃ」

「そうじゃな」

言われてみると悪い話ではない。正室と側室だから角が立つ。だがどちらも側室ならばどうか。同じでありそういうことはない。実吉は話を聞いているうちにこう考えたのだった。

考え出すと彼はすぐに決断を出した。そうしてこう言ったのだった。

「ではそれでいこう」

「それでいいのじゃな」

「うむ、ではそれで頼む」

こうして彼は側室を二人貰うことにした。早速出雲からおしまという女が、豊後からおかよという女がやって来た。二人共町人の娘だったが縁組をしてから彼の側室となった。この時代はこうして身分制度を潜り抜けて結ばれることもわりかしあったのだ。

何はともあれ実吉はこのおしまとおかよをそれぞれ側室とした。

二人はただ外見がいいだけでなく大人しく気立てがよくまた互いの仲もよかった。自分が望むものを全て手に入れた実吉は江戸中でやれ幸せ者よ果報者よとやっかみ半分の声を聞いた。彼もまたそのことにいたく満足していた。二人は同じ部屋で寝起きし共に仲睦まじく働いた。実吉はそんな二人を見て己の幸せをさらに噛み締めていた。しかしであった。

ある日のこと二人は部屋で昼寝をしていた。実吉は用事を思い出したので二人を起こそうとした。そうして部屋の障子に手をかけ少し開けたその時だった。その開いた場所から見たものは。

「な……」

二人は枕を並べてそれぞれの布団の中で眠っている。その顔はそれぞれ非常に穏やかだ。だが穏やかなのは顔だけだったのだ。

口からは蛇が出て互いに向かい合い攻撃し合い髪の毛が上でその蛇と同じように絡み合い攻撃し合っている。実吉はその光景を見てしまったのだ。

「な、何じゃこれは!？」

思わず声をあげると髪の毛は落ち蛇は口の中に引っ込んでしまった。すぐに何もなかったようになる。そして声に気付いた二人がはたと目を醒ますのだった。

「これは旦那様」

「どうかされたのですか？」

「どうかされたのではない」

実吉は目をこすりつつ身体をゆっくりと起こしてきた二人に対して半ば叫んで言う。

「御主等今どうなっておったかわからんのかっ」

「どうなっていたとは」

「眠っていただけです」

「違う、違うぞ」

それを必死に否定する。

「髪の毛が絡み合い攻撃し合って蛇が口から出ていてそれもまた「御冗談を」

「その様なことが起こる筈がありません」

しかし二人はそれを笑って否定する。まさかといった顔で。

「私達はただ寝ていただけです」

「それでどうして」

「何も知らんのか」

二人のその様子を見てこのことを悟った。

「まことに」

「はい、私は嘘を申してはいません」

「私もです」

おしまもおかよも言うのだった。真顔だった。

「ただすやすやと眠っていました」

「それだけです」

「うむ、全く知らぬのか」

このことをあらためて思うのだった。当人達の言葉から。

「これは一体。面妖な」

「それで旦那様」

「何用でしょうか」

「うむ、実はな」

とりあえず用事のことを伝えた。二人はそれを聞くとすぐにその用事に取り掛かった。起き上がった二人は相変わらず仲良く普段と変わりが無い。実吉は先程の髪と蛇のことを思いながらその二人を見ていぶかしんで首を横に振るのだった。

だが彼はそれで終わらせなかった。次の日に彼は知り合いの僧のところに向かった。彼が檀家にしており江戸でも有名な立派な僧だ。彼にこのことを話してどういうわけか知りたかったのだ。

第二章

彼はすぐに寺の伽藍に案内された。その本尊である愛染明王の前でその住職と向かい合う。その憤怒の顔と多くの腕、そのそれぞれの持つ武器が見える。何度も見ている本尊だがこの日はとりわけそれが意識された。

その明王の前で昨日のことを話す。すると住職は静かに口を開いたのだった。

「煩惱ですな」

「煩惱だと」

「左様。これは愛欲です」

こつ彼に言うのであった。

「愛欲ですか」

「もつと詳しく言つと嫉妬です」

こつも言う。

「それが蛇となり髪を動かしたのです。それ以外には考えられませぬ」

「嫉妬!? 馬鹿な」

しかし実吉はそれをすぐに否定した。

「そんなことは有り得ませぬ」

「どうしてですか?」

「あの二人に限っては」

二人をよく知っていると知っている。だからこその言葉だった。

「それぞれ気立てがよく心根も優しく」

「ふむ。それで」

「仲もよいのです。それでどうして嫉妬などと」

「それはお互いが気付いていないのでしょう」

「お互いが」

「そう。そしてそれぞれ」

住職はこうも実吉に述べた。

「自分自身では気付かないこともあります。その心までは」

「では二人は気付かぬうちに嫉妬の心を抱いていたのですか」

「おそろくは。夜も二人一緒ですな」

「はい、共に寝ています」

このことは先にも述べたが今もまた言うのだった。

「それが何か」

「だからですな。やはり」

住職はそれを聞き腕を組み瞑目した。そのうえで述べる。

「常に共にいてはどうしても気が休まらぬもの。嫉妬の心もまた」

「強まると」

「そうです。このままではより恐ろしいことになるでしょう」

「恐ろしいことに」

実吉はそれが何かまでは想像できなかった。だが不吉なものを感じずにはいられなかった。それで思わず住職にこう言ったのだった。

「どうすれば宜しいですか」

「何、話は簡単です」

住職は今度は目を見開いた。そうして明朗な顔でこう述べてきた。

「二人を離れさせるのです」

「離れさせる」

「そうです。幾ら仲がいいといえども同じ側室」

「はい」

それが為に家に入れた。だがどうもそれが仇になっている。実吉

は住職の話を聞いているうちにそのことを悟ったのだった。

「ですから仕事や寝起きは別々にすれば宜しかろう」

「それでいいのですか」

「はい、それで問題はありませぬ」

「わかりました。それでは」

実吉はそこまで聞いて頷いた。

「その様に致します」

「ええ、それではそういうことで
それにしても」

「ここで彼は言うのだった。

「何か？」

「いえ、わからないものですか」

「こう住職に述べるのだった。

「わかりませんか」

「仲良くやっているのです」

それをまた言う。

「ですが。心の中では互いに嫉妬しているとは。表ではわからない
ものなのですか」

「人とはそういうものです」

住職もそれに応えて述べた。

「心の中はわかりにくいものです」

「左様ですか。いや、全く」

住職のその言葉に素直に頷くことができた。今は。

「まさかこんなことになるとは。ですが大事に至らなくて結構なこ
とです」

「何事も気付いたうちにすれば」

住職がまた言葉を出す。

「それで解決するものです。些細であるうちに気付いて」

「全くですか。その通りです」

この日から二人の側室はそれぞれ別の部屋で休み仕事も分けられ
ることになった。二人の仲は前にもましてよくなり実吉は二人を公
平に愛し子室にも恵まれるようになった。だがその陰でこうしたこ
とがあったことは世には知られていない。何事も世間が気付く前に
摘まれるものだからだ。表ではこともなし、というわけだ。

2008.5.3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840e/>

髪と蛇

2010年10月8日15時04分発行